**◎ヴィーナスが美しい理由（わけ）――わたしの存在理由（レゾンデートル）　　　５月２日**

**◎2020年に1月に初めてドラッカーの本を読んだ。「活き活きと仕事し続けるために」**

**パルテノン神殿を作った総監督であるフィディアスに対して、アテネの会計官が文句を言ったのに対して、フィディアスが答えた言葉。**

**‘Nobody can see anything but their fronts. Yet, you have charged us for sculpting them in the round, that is, for doing their backsides, which nobody can see.**’

‘**You are wrong,’ Phidias retorted. ‘The Gods can see them.’** I read this, as I remember, shortly after I had listened to Falstaff, and **it hit me hard**. …

**I have found that the people who maintain their effectiveness take the view Phidias took of his own work: the Gods see it. They are not willing to do work that is only average. They have respect for the integrity of their work. In fact, they have self-respect.**

**◎私が高校１年（か２年）の課題図書で読んだロマン・ロラン著『ベートオヴェンの生涯』：**

**諸君がみずから意識しないときですら諸君は古代の諸彫刻作品の石の心臓に眠っている息を吸い込んでいるではないか。フィディアスの感覚と理性と生命の火との調和を吸い込んでいるではないか。**

◎西田幾多郎「美の本質」から。

**芸術的創造の本源はエラン・ヴィタールにある**のである。**フィディヤスの鑿の尖**（さき）**から、ダ・ヴィンチの筆の端から流れ出づるものは、過去の過去から彼の肉体の中に流れ来った生命の流れである。彼等の中に溢れる生命の流れは、最早彼等の身体を中心とする環境の中に留ることができないで、新なる世界を創造するのである**。… **そこには生命の大なる気息（le grand souffle de la vie）がある**。

**◎ロダンの言葉から**

●グセルによる「考える人」評（９章）

「考える人」では、いくら絶対を抱擁しようと思っても、**どうにもならない「瞑想」が**、おそろしい努力をしながら、屈強な**肉体を縮ませては押しまげ、球のようにまるめては押しつぶしています**。

**（別訳）『考える人』に於いては、空しくも絶対を抱擁せんと願う瞑想が、その恐ろしい努力の下に力士の肉体を縮ませ、それを撓（たわ）め、それを丸めて粉砕しております**。

◎「第８章：芸術における思想LA PENSÉE DANS L’ART」

**●瞑想と手足（872）**

（古川訳）ある日曜日の朝、ロダンと一緒に彼のアトリエの中にいたとき、私は彼のもっとも迫力に富む作品の一つでもあるものの複製［moulage＝塑像］の前に立ちどまった。

それは**肉体が苦悩によじれ曲がった**美しい若い女である。彼女は秘密の**苦痛にさいなまれている**のであろう。その頭は深くうなだれている。その唇と眼蓋は閉ざされて、人は眠っているのだと思うかも知れない。しかし**顔に現われた苦悶が、彼女の心中の激しい争をあばいてみせる**。これを見る人をいたく驚かすものは、それが**腕も脚をも持っておらぬということである**。

彫刻家が自分自身への不満の余りにそれを打ち砕いたものとみえる。そして人はこれほどの力強い像が不完全であるのを惜しまずにいられないのである。人は、それが受けた無残な切断を悲しむ。私が抑えがたいこの感情を主人の前に表わしたとき、

（ロダン）何という非難を私にされるのです？　（彼は若干驚いて私にいった）**それは計画なんですよ**。私の像をこの状態にしておいたというのが。

　それは**『瞑想』**を表わしているのです**。動かそうにも腕がなく、歩もうにも脚を持っておらぬのはその為なのです**。思索が余り先まで押し進められると、遂にそれは正反対な決意に至極く尤もらしい理屈を思いつかせて、**最後には惰性（**inertie）**を誘致する**、ということを貴方は全くお忘れになったのでしょうか？

（グセル）この数語は、私を再び最初の感銘へ立ち帰らせるに充分であった。かくて私は心おきなく、眼前に置かれた彫像の気高い象徴主義を讃えた。

この女性は、私は今や理解したのであるが、それは彼女の**解きえぬ数々の問題に否応なしに駆り立てられ、実現することのできぬ理想にとらえられ、抱き締めるすべもない無限に悩まされている人智の寓意**（emblème）なのであった。

この胴（トルス）の攣縮は思想の懊悩と、それが解答することのできぬ問題を掘り下げようとするその輝かしい、だが空しい根気とを現わしていた。そして四肢の切断は、**実際生活において瞑想的な魂が感ずる打ち勝ち難い嫌悪を示す**ものであった。

（●内藤訳）

**「瞑想」**(**Méditation**)というところですよ。だから、**何かをする腕も持っていないし、歩くための足も持っていない**のです。思索というものは、それが極端になると、まったく反対の決定をするために、いかにも尤もらしい議論の拠りどころを思いつかせて、**ついには人を無気力（**inertie）**にしてしまう**。どうです、君はこんなことに気づいたことはありませんかね。

（グセル）問題の女は、実現することのできない理想につきまとわれ、つきとめることのできない「無限」になやまされて、解決できないさまざまな難問題に一も二もなく唆（そその）かされている**人間知性の象徴**（emblème）**だった**。引き釣っている胴体(contraction)には、責めさいなまれている(torture)心の中と、解答をあたえることはできないながらも、いろいろな問題を掘り下げて行く執拗（しつよう）さ、**花々しくはあっても結局は無益な執拗さ**がはっきり窺（うかが）われた。

　そしてまた、手足が断ち切られているところには、**瞑想を事とする人が、実際生活にたいして感ずる打ち勝ちがたい嫌悪の情が示されていた**。

「人間は深く考えこむと、**しまいには、なんにもしなく(inaction)なりがちなものだ**」

（古川訳）『**極端に深い考えはまことにしばしば無為(inaction)に至る**』

（内藤訳）ほんとうをいえば、すべてが思想です。すべてが象徴です。

そんなわけで、**人間の形と姿勢は、必然的にその心の感動をあらわすのです**。肉体はつねに、その包んでいる精神のあらわれです。だから、物を見る心得のある人にとっては、裸体はもっとも豊富な意味をもつことになる。輪郭のおごそかなリズムの中には、**フィディアス**のように偉大な彫刻家だと、神の「叡智」が全自然の上にひろげた**うららかな調和**をみとめるのです。おっとりしていて、よく釣合がとれていて、**力と美しさとで光っている胴体**が、偉大な彫刻家には、**世界を支配している全能な理性(raison)**を思わすことができるのです。(979)

（古川訳）**それまでは未知であった豊かな富を、彼等自身の中に見出させる**からです。**生命を愛する新たな理由［レゾン］を、身を処すべき新しい内面的光明を、彼等に与えるからです**。

◎「第２章：芸術家にとっては自然のすべてが美しい」

「自然」の中で、普通「醜さ」といわれるものが、芸術の場合には、大きな美しさになることがある。（186）

（高村訳）「性格」に力だけが「芸術」の美を成すところから、**「自然」の中で醜いものほど、芸術の中で美しいという事がよく起ります**。

◎「第６章：女の美しさ」

**●「内なる焔」**

（古川訳）人体、それはなかんづく**魂の鏡**です。そこ（魂）よりしてそれの最大の美は発するのです。… 我々が**人体において崇め称えるもの、それは、あの様に美わしい形にもまして、そこに火と燃えるが如く歴々と見られる内なる焔である**のです。

（高村訳）**人体こそ、わけても魂の鏡**です。そしてまたそれ故にこそ最大の美が存するのです。… **われわれが人体に讃美するところのものは、いかに形は美しくともそれより以上のものです。透き通してそれを照りかがやかせるかと見える内面の火**です。

◎「第９章：芸術における神秘」

（高村訳）**形を普遍化する天賦、即ち生きた現実を空虚にする事なしに形の理法を表わす天賦を持っている芸術家は、みな同じ宗教的感情を生み出します。なぜと言えば、彼は不朽の真実の面前で彼自身体験した戦慄をわれわれに伝えるからです**（224頁）。

●パルテノンのアフロディテ

（高村訳）この三人の女が坐っているに過ぎません。がその姿勢が実に滑らかで実に高貴で、まるで**眼に見えない絶大なある物に関与している**気がします。

●大いなる神秘（不可知の領域）

（高村訳）彼らの上にはまったく**大きな神秘が統治しています**。即ち、**無形な、永遠な「理法（レゾン）」**です。**これには全「自然」が服従します。そしてこの女神もまた彼ら自身その天上界の召使なのです**。

（古川訳）全く彼女達の上には**大きな神秘が支配しています**。すなわち、全自然が服従し、そして彼女達自身さえ天界における召使である**無形の、そして永遠の『理』**。

◎「第１０章：フィディアスとミケランジェロ」

**力というものは、しばしば美しさ（グレース）と一つのものになるし、そしてほんとうの美しさには力がある**。

（高村訳）いや、決して**どんな芸術家でもフィディアス以上にはなれないでしょう**。なぜといえば進歩は世の中には存在するが、芸術には存在しないからです。いっさいの人間の夢が一殿堂の破風の中に閉じ込められ得るような時代に輝いたこの最大彫刻家は、永遠に無比でいるでしょう。

◎「第１１章：芸術家が世の中のやくに立つこと」

**芸術は人間にその存在理由を教えます**。生きることの意味をあきらかにするのが芸術なら、人間にその運命について明るい目をもたせる、したがって、生活の方向づけをするのが、また芸術です。

●『ギリシアの神々』ジェーン. E. ハリソン著。船木裕訳。ちくま学芸文庫。

 　フェイディアスが、アイスキュロスの時代の理想の数々を、金象牙製の偉大なゼウス像に造形したのは、はなはだ幸運なことでしたが、さらに幸運なのは、その神像の観察者たちの記録が一部残されていることです。クウィンティリアヌス（12巻の９）は、オリュムピアのゼウス像について「**その美しさは啓示宗教［超自然的啓示を根拠とする信仰］に対して新たにあるものをつけ加えたように思われる。**」と述べています。

　ディオ・クリュソストモス［紀元40－112］（12巻14）はこう書いています。

　「ヘラス［ギリシア民族］が心一つにまとまり、内紛で党派の争いなき時は、ヘラスの守護者たるわれらがゼウスは、平静いてまことに温厚。完全な形をした優しくも威厳のある完備の相、**生命と呼吸と一切の良き贈物とを授ける存在、《人類共通の父親、救い主にして保護者》**である」

　［このゼウス像は］**われら死すべき人間にとって、不滅の神聖なる属性を心に抱き、形象に表現することのできる限界に達している。その神像は、これを眺める者の悩み多き心に、おのれの比類なく大きな慰安をもたらした。というのは「もしかりに、われわれ死すべき人間のうちで、魂に重荷を背負い、その人生であまたの悲哀と災禍をいたく蒙りながらも、なおみずからに甘美な眠りを得ることの叶わぬ者があるとしても、そのような者でさえ、その神像の前に立つときは、はかなき人の世のいかに耐え難い事柄もことごとく忘れ去るだろう。そう思えるまでに素晴らしく、フェイディアス（Phidias）よ、そなたはその像を心に描き、形に作り上げたのだ。かくも優雅な光輝（grace and light）がそなたの技術から作品に照りそそいでいる。**」

**●キケロ**（紀元前106-43）

　フィディアスは、天にのぼり、神を見て、その姿を、地上で刻んだ。

 In the Orator, **Cicero recounts the story of Phidias, who, when sculpting his statues of Jupiter and Minerva “did not look at any person whom he was using as a model, but in his own mind there dwelt a surpassing vision of beauty;**

**●ゲーテ**

**・『**ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代**』**

諸芸術はまた**自分自身から多くを生み出し、他方、自然が完全となるに欠けているものを数多く付け加える**、――芸術は自分自身のうちに美をもてるがゆえに。それゆえに**フィディアス**は、何ら肉の眼に見ゆるものを模倣したのではないが、神を刻むことができた。彼は、もしツォイスがわれわれの眼にふれることもあったらこうもあらわれたであろうという姿を心のうちに捉えたのである。

**・『ヴィンケルマン』から**

　ひとたび芸術作品が産み出され、その理想的な現実とともに世に姿を見せるや、それは持続的な効果をもたらし、最高の効果を発揮する。

　なぜなら芸術作品とは全体の力から精神的に展開されるものであり、それゆえ**すべての卓越したもの、尊敬と愛に値するものを取り入れ**、**人間の形姿に魂を吹きこむことによって人間を人間以上に高め**、その生活および行為の円環を完結し、過去と未来とを包括する現在のために人間を神化するからである。

　私たちが古代人の叙述、報告、証言などから解明できるように、かつて**オリュンピアのユピテル**を眺めた人々は、このような感情に捉えられた。

　人間を神に高めるために、神が人間になったのである。彼らは至高の尊厳を目（ま）のあたりにし、最高の美に胸を打たれた。

　この意味において私たちは、「**この作品を見ずに死ぬのは不幸である」と心からの確信をもって語った**古代人たちを是認すべきであろう。…

　友情と美の二つの要求が同時に一つの対象において満たされるとき、人間の**幸福と感謝の念**は、きわまるところを知らない。そして人間は、彼の所有物のすべてを、**帰順と崇拝（Anhänglichkeit und seiner Verehrung）のささやかな印として捧げたいという気持ちになる**であろう。

◎『ドイツ彫刻家協会』1817年（新井靖一訳）

　しかしながら、造形芸術においては**考えたりしゃべったりすることはまったく容認しがたく、また無益であり、芸術家はむしろ価値ある対象を自分の目で見ることが必要である**、この理由から彼は非常に古い時代の遺物に心を向けなければならない。そしてそういうものは何といってもペイディアスとその同時代人の作品のうちにしか見出すことができないのである。現在われわれはきっぱりとこのように言うことができる。というのも、この種の申し分ない遺物がすでにロンドンにあるからであり、したがってわれわれはどの造形芸術家にもただちに**適切な典例**を指示することができるのである。

　**それゆえドイツのいかなる彫刻家も、己れの自由にしうる資産のすべてを使って、あるいは友人、後援者、その他の偶然によって彼に与えられるすべてを利用して、英国に旅し、そこにできるだけ長く滞在するようにせねばならない**。というのも、彼の地ではまず第一にエルギンの大理石像が、次いでかの地にあるその他の、博物館に併合されているコレクションが、**およそ人類の住む世界においてこれ以上のものは見出されないような機会を与えてくれるからである**。

　彼の地についたなら彫刻家はなにをおいてもまず**パルテノン**とフィガリア**神殿のほんのわずかな遺物をも大いに気を入れて研究してもらいたい**。ほんの小さな部分、いや破損した部分からさえも啓発されるところがあるだろう。